# Y11c　中学校における望遠鏡の使用状況 — 群馬県内のアンケート調査から —

○岡崎　彰、須藤俊介、吉野晃生 (群馬大)

現行の中学校学習指導要領解説（理科）では、天体望遠鏡で太陽など天体の観察を行うことが記されている。しかし、その一方で、赤道儀式天体望遠鏡の組立や操作は、経験のない理科教員には苦手意識のあることが多く、学校に備えられている望遠鏡は必ずしも十分に活用されていないともいわれている。そこで、その実情を探るため、平成 20 年 3 月、群馬県内の中学校（182 校）を対象として、天体望遠鏡の使用状況についてのアンケート調査を行った。103 校（回答率 56%）から回答を得たので、その結果について報告する。

各中学校における「望遠鏡の所有台数」は「1 台」が 54%、「2 台」が 26%、「4 台以上」3%あったが、その一方で所有していない（「0 台」）中学校が 15%もあった。望遠鏡の「年間使用回数」については、「1〜2 回」が 60%、「3 回以上」は極端に少なく 4%にとどまった。それに対して、使用していない（「0 台」）中学校は 36%あった。上記と併せて考えると、望遠鏡を所有しているが使用していない中学校が約 20%に及ぶことがわかった。使用している中学校に「どのような場面で使用しているか」を尋ねたところ、ほとんどが「理科の授業」と回答した。「観測対象」については、ほとんどが「太陽」をあげた。

担当教員の「望遠鏡操作に対する意識」では、「慣れている・どちらかといえば慣れている」が 34%、「慣れていない・どちらかといえば慣れていない」が 66%であった。また、「望遠鏡を意識的に使おうと考えている」が 35%なのに対して「考えていない」が 43%と多く、「どちらともいえない」は 22%であった。

今後は、これらの調査結果をもとに、中学校理科教員が望遠鏡を活用しやすい状況をつくるための一助として、望遠鏡活用マニュアル作成の取り組みを進めていく予定である。